『江戸川大学紀要』第 31 号（2021 年 3 月）pp. 39-48

具象画および抽象画の評価と曖昧さへの態度との関連

薊　　理津子*・戸　塚　万　葉**

要　約

本研究では具象画と抽象画を取り上げ，これらの絵画への評価と曖昧さへの態度との関連性を検討した。調査参加者は大学生 81 名であり，全員が全ての絵画（具象画 6 枚，抽象画 6 枚）について形容詞対 8 項目（「快い―不快な」「派手な―地味な」など）に回答した。絵画の評定に用いた形容詞対 8 項目に関する因子分析（主因子法，promax 回転）の結果，「評価性」因子と「活動性」因子が抽出された。そして，具象画の得点から抽象画の得点を引いた差を各因子で算出し，これらに対する曖昧さへの態度による影響を検討するために重回帰分析を実施した。結果，「曖昧さへの不安」は具象画の評価性を高めた。また，「曖昧さへの享受」と「曖昧さの排除」は抽象画の活動性を高めた。曖昧さへの態度によって心理的不適応との関連が異なることから，現実社会における本研究の応用について議論された。

キーワード：絵画，具象画，抽象画，曖昧さへの態度

問題・目的

絵画は美術館で展示されているだけでなく，公共の場や個人の家など，日常生活の至るところに飾られている。絵画と一口に言っても，描かれる対象や表現は多様であり，絵画には技法や画材，表現方法，表現している内容などによって様々な分類がある。その中に，具象画と抽象画という分類がある。具象画とは，見たとおりの形で表現され，一目で何が描かれているかわかる絵画であり，抽象画とは，概念的に表現され，一見して何が描かれているかわからない絵画である。本研究では，具象画と抽象画という分類に基づき検討を進める。

岡田・井上（1991）は SD 法を用いて，具象画と抽象画に対する印象にどのような差があるか検討している。SD 法によって測定した項目について因子分析を行った結果，活動性（「派手な―地味な」，「動的―静的」など），評価性（「好き―嫌い」，「美しい―醜い」など），個性とバランス（「個性的―平凡」，「安定―不安定」など），女性的なやわらかさ（「やわらかい―かたい」，「男性的―女性的」など）の 4 因子が抽出された。いずれの因子においても具象画と抽象画との間に評定差がみられ，具象画では評価性と女性的なやわらかさの評定が高く，抽象画では活動性と個性とバランスの評定が高いことが示された。つまり，具象画と抽象画では絵画を鑑賞する人間に与える印象に差があることが示された。また，栗川（2014, 2015）も，SD 法を利用して，具象画と抽象画に対する評価性と活動性の印象評定を求めており，岡田・井上（1991）と同様に，具象画は抽象画よりも評価性の評定が高く，抽象画は具象画よりも活動性の評定が高いという結果が示されている。岡田・井上（1991）は，美術に関する初心者は複雑で抽象性の高い絵画をあまり好まないために，具象画の方が抽象画よりも評価性の評定が高くなると述べている。また，岡田・井上（1991）は抽象画について個性とバランス因子が高く評定されていることから，フォルムの崩壊が絵画鑑賞者の

2020 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　人間心理学科准教授　社会心理学
** 江戸川大学　人間心理学科 2019 年度卒業生

印象に影響を及ぼしていることを指摘した。抽象画はフォルムが崩壊しているために，具象画よりも直線的な表現が多用されており，画面が直線で区切られることからメリハリがつくと論じられている。そして，抽象画で多用されている直線が絵画に躍動感や緊張感を生むために，抽象画の方が具象画よりも活動性の評定が高くなると示唆された（岡田・井上 , 1991）。

上記のような具象画と抽象画に対する評価の差は，美術に関する知識や絵画で用いられている表現技法により生じると示唆されている。しかし，両絵画の評価の差異には，パーソナリティのような他要因による影響も考えられる。これまでに，絵画に対する評価とパーソナリティとの関係性を検討した研究は国外を中心に行われている（e.g., Chamorro-Premuzic & Furnham, 2004; Chamorro-Premuzic, Brke, Hsu, & Swami, 2010）。本研究では，曖昧さへの態度というパーソナリティに焦点を当て，曖昧さへの態度と具象画と抽象画に対する評価との関連性を検討する。その理由は以下の通りである。曖昧さへの態度は心理的不適応と関連することが示唆されている（西村，2007a, b）。加えて，ロールシャッハテストや TAT などの多義的な図版を用いた投影法による著名な心理検査があり，心理査定を行う方法の１つとして用いられる。心理査定は個人が抱える現在の問題と関係を理解しようとすることであり（中島他，1999），心理的不適応を測定する心理検査は少なくない。ゆえに，本研究で，曖昧さへの態度が絵画の評価に及ぼす影響を検討することは，図版を用いた心理検査への一資料となることが期待される。

曖昧さへの態度

曖昧さとは，十分な手がかりがないために，適切な構成や分類ができない状態である（Budner, 1962）。そして，曖昧さへの態度とは，曖昧な刺激の処理に応じて生じる，認知的，情緒的反応パターンと定義されている（西村，2007a）。これまで，曖昧さへの態度は，曖昧さへの耐性，特にその耐性の低さが中心に論じられていたという（西村，2007a）。曖昧さへの耐性とは，今川（1981）によれば，刺激の持つ特徴を曖昧さという側面からとらえ，それに対する反応の相違の個人差である。曖昧さへの耐性の低さは，偏った態度や個人の心理的不適応と関連すること，及び，心理的に困難を抱えている者の特徴として指摘されている（西村，2007a）。

曖昧さへの耐性と絵画の好みとの関連性については，Furnham & Avison（1997）が超現実主義的絵画と具象画を対象として検討した。Furnham & Avison（1997）は超現実主義的絵画は曖昧であり，調和がとれていない，なじみのないイメージを含むため，曖昧さへの耐性が高いほど超現実主義的絵画を好むと考えた。対照的に，曖昧さへの耐性が低い人は，現実的で容易に解釈できる伝統的な具象画を好むと考えられた。結果，曖昧さへの耐性と一部の超現実主義的絵画に対する好意度との間に有意な正の関係性が示された。一方，曖昧さへの耐性と具象画に対する好意度との間には関係性は示されなかったが，一部の具象画に対する好意度との間の相関係数は有意ではないものの負の値を示していた。以上の結果から，Furnham & Avison（1997）はこれらの絵画に対する好みと曖昧さへの耐性との間には強い関係性はないと述べている。Furnham & Avison（1997）で用いられている超現実主義的絵画は抽象的な要素を含んでいる（井島，1954）ため，本研究で扱う抽象画と置き換えて解釈しても問題ないだろう。Furnham & Avison（1997）に基づけば，具象画と抽象画に対する評価は曖昧さへの耐性と関連性がほとんどないと考えられる。しかし，Furnham & Avison（1997）は好み（preference）という指標を用い，1 項目で測定しており，評価性や活動性といった印象を複数項目で測定しているわけではない。また，曖昧さへの態度を曖昧さへの耐性という１次元で扱っている。

西村（2007a）は，曖昧さに対する態度は１次元的なものではないと指摘し，曖昧さに対する態度を多次元的に測定する曖昧さへの態度尺度を作成した上で，曖昧さへの態度には肯定的態度と否定的態度があることを示した。肯定的態度は，曖昧さに肯定的に関与しようとする「曖昧さの享

受」，曖昧さへの親和性と寛容性を表す「曖昧さの受容」という態度であった。否定的態度は，曖昧さに対する情緒的混乱と対処困難を表す「曖昧さへの不安」，曖昧な状況を否定的に評価し対処しようとする「曖昧さの統制」，曖昧さを認めずに明確に決着をつけようとする「曖昧さの排除」という態度であった。また，西村（2007a）は強迫傾向，抑うつ傾向，愛着スタイルを心理的不適応の指標とし，曖昧さへの態度との関連を検討した。結果，曖昧さへの否定的態度の中の「曖昧さへの不安」はいずれの心理的不適応とも正の関係性がみられ，「曖昧さの統制」は強迫傾向と正の関係性がみられた。さらに，曖昧さへの肯定的態度である「曖昧さの受容」は強迫傾向と負の関係性がみられ，加えて，「曖昧さの享受」は愛着スタイルの安定型において持たれやすい態度であることが示された。つまり，曖昧さへの肯定的態度が心理的適応に関連し，曖昧さへの否定的態度の中でも特に「曖昧さへの不安」が心理的不適応と関連することが示唆された。

さらに，西村（2007b）は，曖昧さへの態度とBig Fiveおよび自己志向的完全主義との関連性を検討した。この研究では心理的不適応の指標として，Big Fiveの情緒不安定性，自己志向的完全主義の「失敗を過度に気にする傾向」と「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」を扱っている。また，心理的適応の指標として自己志向的完全主義の「自分に高い目標を課する傾向」を扱っている。結果，曖昧さへの否定的態度である「曖昧さへの不安」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」は，Big Fiveの情緒不安定性との間に正の関係性が示された。しかし，自己志向的完全主義については，曖昧さへの否定的態度の側面によって相違が見られた。「曖昧さへの不安」は自己志向的完全主義の心理不適的側面とのみ正の関係性が示されたが，「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」は自己志向的完全主義の心理不適応的側面だけでなく心理適応的側面との間にも正の関係性が示された。一方，曖昧さへの肯定的態度については，「曖昧さの享受」は自己志向的完全主義の心理適応的側面との間に正の関係性があることが示された。「曖昧さの受容」はBig Fiveの情緒不安定性との間に正の関係性が示された。この結果から，曖昧さに対して，どのような態度を抱いているかによって心理的不適応との関連性が異なることが示されたといえる。曖昧さへの否定的態度については，西村（2007a）と同様に，特に「曖昧さへの不安」が心理的不適応と関連の強い態度であり，「曖昧さの統制」と「曖昧さの排除」は「曖昧さへの不安」に比べて心理的不適応と関連していないことが示唆された。そして，曖昧さの肯定的態度については，「曖昧さの享受」は心理適応と関連する態度であること，「曖昧さの受容」は心理的適応的側面と不適応的側面があることが示唆された。

以上より，曖昧さへの態度は曖昧さへの耐性という一次元で捉えるのではなく，多次元的にとらえる必要があるといえる。Furnham & Avison（1997）では，曖昧さへの耐性と絵画に対する評価との間に強い関連性は見られなかった。しかし，曖昧さへの態度を多次元的に捉え直すことによって，曖昧さへの態度の側面によっては，抽象画と具象画に対する評価に相違が示される可能性がある。

本研究の目的および仮説

本研究では，具象画と抽象画を対象として，絵画の印象を岡田・井上（1991）と栗川（2015）のようにSD法で測定し，評価性と活動性の因子を抽出した上で検討する。そして，絵画の評価と曖昧さへの態度との関連を検討することを本研究の目的とする。

本研究の仮説は3つある。岡田・井上（1991）と栗川（2014, 2015）から，具象画の方が抽象画よりも評価性が高く，抽象画の方が具象画よりも活動性が高く評定されることが示されている。したがって，具象画の方が抽象画よりも評価性の評定が高くなり，抽象画の方が具象画よりも活動性の評定が高くなるだろう（仮説1）。次に，絵画の評定と曖昧さへの態度との関連については，Furnham & Avison（1997）による曖昧さへの耐性が高いと抽象度が高い絵画を好み，曖昧さへの耐性が低いと具象画を好むという考えに基づき仮

説を立てる。曖昧さへの耐性の高さは曖昧さへの肯定的態度，曖昧さへの耐性の低さは曖昧さへの否定的態度といえる（西村，2007a）。そして，評価性には Furnham & Avison（1997）が測定した好みに関する項目が含まれる（具体的項目は表 2 を参照されたい）。これらのことから，曖昧さへの肯定的態度と抽象画の評価性との間に正の関係性が示されると考えられる（仮説 2）。最後に，曖昧さへの否定的態度と抽象画の評価性との間に負の関係性が示され，曖昧さへの否定的態度と具象画の評価性との間に正の関係性が示されると考えられる（仮説 3）。

なお，曖昧さへの態度と活動性との関連性については先行研究がないため，本研究ではこれに関する仮説を立てない。

方　法

調査参加者

調査参加者は大学生 81 名（男性 52 名，女性 29 名），平均年齢は 19.67（*SD*=0.99）であった。

調査実施時期

2019 年 7 月に調査を実施した。

調査方法

心理学関連の授業において調査参加者を募集した。依頼時に調査は無記名で行われること，個人情報の保護に最大限配慮することを文書と口頭で説明をした。合意を得た後に，Google フォームによる Web アンケートに回答を求めた。Google フォームの URL は学習支援システム上に掲載され，調査参加者が所持しているスマートフォンまたはノートパソコンでアクセスするよう指示した。回答時間は 15 分程度であった。なお，調査の実施にあたり，江戸川大学社会学部人間心理学科研究倫理小委員会（承認番号 A2019-035）の承諾を事前に得た。

材　料

絵画は岡田・井上（1991）で利用されていた 10 枚，栗川（2015）で利用されていた 10 枚の計 20 枚の中から選出した。選出過程は次の通りである。まず，画像の粗いもの，見えづらいもの，特定の人物を描いた肖像画や錯視を利用した絵画であるオプ・アートを除いた。そして，各作品は全て異なる作者によるものとし，具象画と抽象画が同数になるよう，且つ，縦長の絵画と横長の絵画が同数となるよう選定した。最終的に具象画 6 枚，抽象画 6 枚の計 12 枚を選出した。選出した絵画を Table 1 に示す。なお，使用した絵画の一部はパブリックドメインのものであり，パブリックドメインのものではない場合は所蔵美術館の規約の下に使用した。

質問紙の内容

1. フェイスシート

年齢・性別の記入を求めた。

2. 絵画についての質問

絵画の呈示順序についてカウンターバランスをとるために，呈示順序は 3 パターンを作成した。調査参加者はいずれか 1 つのパターンに回答した。それぞれの絵画を呈示後，絵画研究（e.g., 栗川，2014，2015；岡田・井上，1991）において利用頻度の高い形容詞対 8 項目（「好きな―嫌いな」「派手な―地味な」など）に 7 件法で回答を求めた（表 2）。得点については，表 2 に示す形容詞対の左に位置する形容詞を 1 点とし，右に位置する形容詞を 7 点とした。例えば，「好きな―嫌いな」であれば，左に位置する形容詞である「好きな」を 1 点，右に位置する形容詞である「嫌いな」を 7 点とした。なお，分析時には左に位置する形容詞が高得点になるように逆転処理を行った。

次に，絵画を知っていたか否かについて，「はい」「いいえ」の選択肢で回答を求めた。

3. 曖昧さへの態度尺度

曖昧さへの態度を多側面から測定する尺度である，曖昧さへの態度尺度（西村，2007a）を用いた。この尺度は，「いろんな可能性があると，すべてを試してみたくなる。」「いくつかの解釈ができると，いろんな角度からものごとを見れる点では自由な感じがする。」など「曖昧さの享受」因

子 7 項目（α=.91），「はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。」「見たことがないものに出会うと怖くなる。」など「曖昧さへの不安」因子 6 項目（α=.79），「はっきり決めないままにしておいた方が気が楽なこともある。」「不完全なままにしておいた方がよい時もある。」など「曖昧さの受容」因子 5 項目（α=.80），「情報がたりないと動きづらいので，できるだけ情報を集めたい。」「情報がたりないと正確な判断はできない。」など「曖昧さの統制」因子5項目（α=.84），「どっちつかずな立場はどちらか一方にはっきりさせるべきだ。」「どっちつかずであることはよくないと思う。」など「曖昧さの排除」因子 3 項目（α=.67）の計 26 項目で構成されている。それぞれについて「まったくあてはまらない（1 点）」「あてはまらない（2 点）」「ややあてはまらない（3 点）」「ややあてはまる（4 点）」「あてはまる（5 点）」「非常にあてはまる（6 点）」の 6 件法で回答を求めた。なお，曖昧さへの排除のα係数が若干低かったものの，分析に使用した。

結　果

絵画を知っていたか否かについての集計

それぞれの絵画を知っていたか否かを尋ねた質問の回答を集計した結果，「知っていた」と回答した人数は 0 人（0.0%）から 7 人（8.6%）であった（Table 1）。絵画を知っていたか否かによって，以降の分析結果に相違があるかどうかを確認したところ，大きな相違はみられなかった。ゆえに，以降では全てのデータを対象とした分析結果を記載した。

形容詞対に関する因子分析

全ての絵画に対して評定を求めた形容詞対 8 項目の回答を統合し，これらの項目について因子分析（主因子法，promax 回転）を行った。因子数の決定に関しては，固有値の減衰状況（3.40, 2.36, 0.72, 0.43 …）や解釈可能性から総合的に判断した。因子の基準を絶対値 0.35 以上とし，両因子負荷が見られた「明るい―暗い」を除き，2 因子が得られた（Table 2）。

第 1 因子は「快い―不快な」「良い―悪い」など，絵画の評価に関する項目で構成されており，第 2 因子は「派手な―地味な」「激しい―穏やかな」など，絵画の活動性に関する項目で構成されていた。両因子とも，岡田・井上（1991）や栗川（2014, 2015）の研究とほぼ同様の因子内容が得られたため，岡田・井上（1991）や栗川（2014, 2015）の研究に基づき，第 1 因子を「評価性」，第 2 因子を「活動性」と命名した。

以降，具象画と抽象画で形容詞対の各因子の合

Table 1　本研究で使用した絵画について「知っていた」と回答した人数（%）

	作　者	絵画のタイトル	「知っていた」と回答した人数（%）
具象画	ヘーム	朝食図	4（4.9）
	カナレット	大運河とサルーテ教会	4（4.9）
	コロー	ヴィル＝ダヴレーの森にて	3（3.7）
	ジョルジョーネ	テンペスト	5（6.2）
	ルノワール	テラスにて	3（3.7）
	ゴッホ	アルルの寝室	7（8.6）
抽象画	メッサンジェ	窓辺のテーブル	3（3.7）
	草間彌生	開花の季節に巡りあって	2（2.5）
	ピカソ	ブランデーのボトル，ギター，グラス，新聞紙	0（0.0）
	カンディンスキー	コンポジションⅦ	1（1.2）
	クレー	肥沃な国のモニュメント	3（3.7）
	ミロ	青Ⅲ	3（3.7）

Table 2　形容詞対に関する因子分析の結果（主因子法，promax 回転）

	F1	F2	共通性
F1：評価性（α=.90）			
良い―悪い	**.87**	.05	.75
好きな―嫌いな	**.86**	.07	.73
快い―不快な	**.84**	-.06	.62
美しい―醜い	**.78**	-.03	.73
F2：活動性（α=.83）			
激しい―穏やかな	-.16	**.84**	.62
派手な―地味な	.15	**.80**	.55
動的―静的	.02	**.74**	.79
因子間相関	F1	-.20	

成得点をそれぞれ算出し，分析に用いた。

絵画の種類間での形容詞対の評定の差

形容詞対の各因子について，具象画と抽象画による平均値の差を検討するために対応のある t 検定を行った（Table 3）。評価性において有意差が認められ，具象画の方が抽象画よりも得点が有意に高かった（t (80)=9.03, p<.001）。活動性においても有意差が認められ，抽象画の方が具象画よりも得点が有意に高かった（t (80)=13.76, p<.001）。

Table 3　形容詞対の各因子の *M* と *SD* および *t* 検定の結果

	具象画		抽象画		自由度	t 値
	M	*SD*	*M*	*SD*		
評価性	5.03	0.73	4.06	0.88	80	9.03***
活動性	3.08	0.63	4.42	0.53	80	13.76***

***p<.001

曖昧さへの態度と，具象画と抽象画の差との相関

具象画と抽象画との評定の差を検討するために，形容詞対の各因子で具象画から抽象画の得点を引いた差を算出した。つまり，差の得点が正の値であれば，具象画の評定が高く，負の値であれば抽象画の評定が高いことを意味する。そして，これらの差と曖昧さへの態度との関連を調べるために相関係数を算出した（Table 4）。

Table 4　曖昧さへの態度と形容詞対の各因子の差との相関

	具象画の得点から抽象画の得点を引いた差	
	評価性	活動性
曖昧さの享受	-.05	-.38***
曖昧さへの不安	.31**	-.17
曖昧さの受容	.06	-.14
曖昧さの統制	.10	-.33**
曖昧さの排除	.09	-.24*

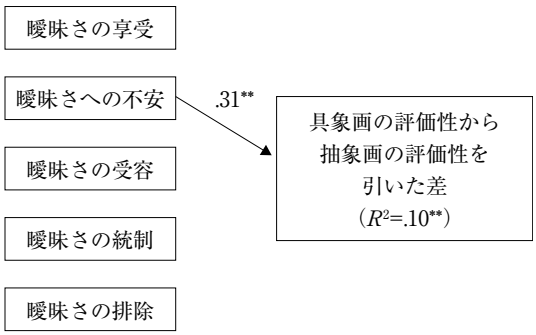
*p<.05, **p<.01, ***p<.001

まず，評価性の差は曖昧さへの不安との間に有意な正の相関が示された（r=.31, p<.01）。活動性の差は，曖昧さの享受（r=-.38, p<.001），曖昧さの統制（r=-.33, p<.01），曖昧さの排除（r=-.24, p<.05）との間に有意な負の相関がみられた。

曖昧さへの態度による形容詞対への影響

上記の相関分析と同様に，具象画と抽象画との評定の差を利用して，曖昧さへの態度が形容詞対の各因子の差に与える影響を検討した。曖昧さへの態度を説明変数とし，形容詞対の各因子の差を基準変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。

評価性の差を基準変数とした重回帰分析に基づくパス図を Figure 1 に示す。結果，曖昧さへの

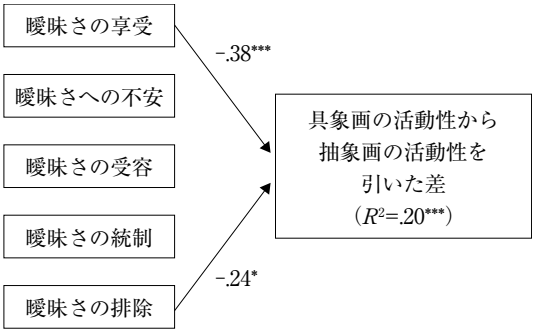


*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Figure 1　具象画と抽象画の評価性の差に関する重回帰分析の結果

不安のみ正の標準偏回帰係数が有意であった（β=.31, p <.01）（R^2=.10, p<.01）。

活動性の差を基準変数とした重回帰分析に基づくパス図を Figure 2 に示す。結果，曖昧さへの享受（β=−.38, p<.001）と曖昧さの排除（β=−.24, p<.05）の負の標準偏回帰係数が有意であった（R^2=.20, p<.001）。



*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Figure 2　具象画と抽象画の活動性の差に関する重回帰分析の結果

考　察

本研究の目的は，絵画の評価と曖昧さへの態度との関連を検討することであった。仮説は次の 3 つであった。具象画の方が抽象画よりも評価性の評定が高くなり，抽象画の方が具象画よりも活動性の評定が高くなるだろう（仮説 1）。曖昧さへの肯定的態度と抽象画の評価性との間に正の関係性が示される（仮説 2）。また，曖昧さへの否定的態度と抽象画の評価性との間に負の関係性が示され，曖昧さへの否定的態度と具象画の評価性との間に正の関係性が示される（仮説 3）。

具象画と抽象画の評価（仮説 1）

具象画と抽象画の評定について t 検定の結果から，評価性については具象画の方が抽象画よりも評価性が高く，活動性については抽象画の方が具象画よりも高く評定されたことが示された。したがって，具象画の方が抽象画よりも評価性の評定が高くなり，抽象画の方が具象画よりも活動性の評定が高くなるという仮説 1 は支持された。

美術に関する初心者は複雑で抽象性の高い絵画をあまり好まないために，評価性の評定が具象画の方が抽象画よりも高くなるという（岡田・井上，199）。それぞれの絵画を知っていたか否かを尋ねた質問に対する回答を集計したところ，本研究の調査参加者で絵画を知っていた人はほとんどいなかった。このことから本研究の調査参加者は美術に関する初心者であった可能性が高いと考えられる。ゆえに，本研究における評価性の結果については，岡田・井上（1991）と同様に，美術に関する初心者が抽象性の高い絵画をあまり好まなかったために抽象画の評価を低く評定したと考えられる。一方，抽象画の活動性が高く評価された結果について，本研究では，岡田・井上（1991）のように，絵画に対して個性や不安定さといった印象を測定していない。そのため，本研究の参加者が抽象画のフォルムをどのように評価しているかについては不明である。しかし，岡田・井上（1991）と同様に抽象画の活動性が高く評価されたという本研究の結果は，岡田・井上（1991）が示唆するように抽象画の表現が躍動感や緊張感を生じさせている可能性があるといえよう。

曖昧さへの態度が絵画の印象評定に及ぼす影響（仮説 2，仮説 3）

重回帰分析の結果から，曖昧さへの否定的態度である曖昧さへの不安の高さが具象画の評価性を高めることが見出された。本研究で算出した差は，具象画の評価性得点から抽象画の評価性得点を引いた値である。つまりこの結果は，曖昧さへの不安が抽象画の評価性を低めているとも言える。加えて，曖昧さへの肯定的態度に関する因子については，具象画と抽象画との評価性の差に有意な影響を及ぼすものは見出されなかった。以上の結果は仮説 3 を支持したものの，仮説 2 を支持するものではなかった。

Furnham & Avison（1997）では，曖昧さへの耐性と絵画に対する好みとの間の明確な関係性は実証的に示されなかった。本研究の評価性は「好きな―嫌いな」が含まれており，Furnham &

Avison（1997）で測定された絵画に対する好みを含む変数である。本研究において曖昧さへの態度を多次元的に測定したことによって，曖昧さへの態度と絵画に対する好みを含む評価との間に関係性が見出されたといえる。

仮説 2 が支持されなかった点について，曖昧さへの肯定的態度は絵画の好みや美醜の評価と関連しない可能性が挙げられる。つまり，曖昧さへの否定的態度，特に，曖昧さに不安を感じる態度こそが絵画の好みや美醜の評価と関連すると考えられる。また，曖昧さへの不安は曖昧さに対する情緒的否定的態度であるのに対し，曖昧さの統制と曖昧さの排除は認知的な否定的態度である（西村，2007a）。加えて，評価性は「好きな―嫌いな」以外にも「良い―悪い」といった感性的な美的評価項目で構成されている（長・原口，2014）。Ishizu & Zeki（2013）は，脳神経科学的研究から，美的評価は快感情や報酬系に関係する内側眼窩前頭皮質の活動と関係することを示している。そして，美的評価が高まるほど，この脳部位の活動が強まることが示されている（Kawabata & Zeki, 2004）。つまり，評価性因子の評定が高いほど絵画に対して快感情を抱いていることを意味する。曖昧さへの否定的態度の情緒的態度が絵画に対する感情的評価と関連したと考えられる。

活動性については，重回帰分析の結果から，「曖昧さの享受」と「曖昧さの排除」の高さが抽象画の活動性を高めることが示された。この結果と，抽象画が具象画よりも活動性が高く評定されたという t 検定の結果，および岡田・井上（1991）による抽象画の表現が躍動感や緊張感を生むという示唆を合わせて考察する。西村（2007a）によると，「曖昧さの享受」は「曖昧さを魅力的に評価し，関与していくことに楽しみを見出す傾向」である。曖昧さを享受する態度を有する人は，抽象画の表現が生み出す躍動感や緊張感をより魅力的に捉え，楽しみを見出したために，抽象画の活動性を高く評価した可能性があるといえるだろう。また，「曖昧さの排除」は「曖昧さを認めず，排除して白黒つけたい傾向」である（西村，2007a）。曖昧さを排除したい態度を有する人は，抽象画で表現されている躍動感や緊張感をより激しく極端に評定したため，抽象画の活動性を高く評価した可能性があると考えられる。

本研究の社会への応用，本研究の問題点と今後の展望

本研究では絵画の評定に対して，曖昧さへの不安，曖昧さの排除，曖昧さの享受が関連していることが見出された。曖昧さへの不安は心理的不適応と関連の強い態度であり（西村 , 2007a, b），曖昧さの排除は曖昧さへの不安ほどではないが，Big Five の情緒不安定性などの心理的不適応指標と関連している（西村，2007b）。曖昧さの享受は心理的適応と関連する態度である（西村，2007b）。つまり，心理的適応および不適応と関わる曖昧さへの態度が絵画の評価に影響することが示された。先述した通り，ロールシャッハテストや TAT に代表される，多義的な図版を利用する投影法による心理検査がある。また，絵画を用いた心理療法として絵画鑑賞療法（高田・黒須，1997）がある。本研究で得られた結果は，図版を用いた心理検査や絵画を用いた心理療法に対する一資料を提供したといえよう。

加えて，現代の社会において絵画はあらゆる場所で飾られているが，本研究の結果から，絵画を飾ることについて一考を促す資料が提供されたといえる。例えば，どのような絵画が病院で飾られているか検討した高田（1998）による研究がある。それによると，風景画が全体の約 40％と最も多かったが，抽象画は全体中約 6％と少ないものの病院内で飾られていた。さらに，病棟と廊下は絵画が多く飾られている場所であり，抽象画は廊下で飾られていることが最も多く，病棟や待合室，診察室でも飾られていることが示された。同研究では，絵画を飾った理由と飾ったことによる影響についても検討しており，患者のために飾ったという回答が約 80％を占め，また，患者への影響として，心の癒しや不安や緊張を緩和させるという回答が約 70％を占めていた。本研究の結果から，心理的不適応と関連する曖昧さに対する不安，および，曖昧さの排除といった態度を有す

る者にとっては，抽象画が飾られていることは心の癒しにはならず，むしろ不快感情や緊張を高める可能性があるといえる。特に心理的問題を抱えている人間が集まる可能性がある場所では，抽象画を飾らないなどの配慮の必要性が提言できるだろう。

最後に，本研究の問題点と今後の展望について述べる。本研究では，各絵画について知っていたか否かについては尋ねたが，絵画に対する知識がどの程度のものなのかを尋ねていなかった。曖昧さとは十分な手がかりがないため適切な構成や分類ができない状態である（Budner, 1962）。ゆえに，絵画に対する知識が絵画の持つ曖昧さに影響を与える可能性は十分に考えられる。今後は，絵画に対する知識を尋ねた上で検討するべきであろう。

附　記

本論文は，戸塚万葉氏が筆者の指導の下，令和元年度江戸川大学社会学部人間心理学科の卒業論文として提出したものを第1著者が再分析および修正加筆したものである。

引用文献

Budner, S.（1962）. Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality, 30*, 29-50.

Chamorro-Premuzic, T., & Furnham, A.（2004a）. Art judgment: A measure related to both personality and intelligence? *Cognition and Personality, 24*, 3-24.

Chamorro-Premuzic, T., Burke, C., Hsu, A., & Swami, V.（2010）. Personality Predictors of Artistic Preferences as a Function of the Emotional Valence and Perceived Complexity of Paintings. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts, 4*, 196-204.

長　潔容江・原口雅浩（2014）. 絵画印象における評価性因子の構造　久留米大学心理学研究, *13*, 39-44.

Furnham, A., & Avison, M.（1997）. Personality and preference for surreal paintings. *Personality and Individual Differences, 23*, 923-935.

井島　勉（1954）. 抽象絵画と図案の限界 美術教育, *21*, 2-4.

今川民雄（1981）. Ambiguity Tolerance Scale の構成（1）── 項目分析と信頼性について ──　北海道教育大学紀要第一部 C 教育科学編, *32*, 79-93.

Ishizu, T., & Zeki, S.（2013）. The brain's specialized systems for aesthetic and perceptual judgment. *European Journal of Neuroscience, 37*, 1413-1420.

Kawabata, H., & Zeki, S.（2004）. Neural correlates of beauty. *Journal of Neurophysiology, 91*, 1699-1705.

栗川直子（2014）. 絵画と額縁の組み合わせ効果における理解度の影響　日本感性工学会論文誌, *13*, 411-417.

栗川直子（2015）. 絵画の美的評価に影響を及ぼす要因の検討 ── 絵画の具象性と理解度 ──　大阪千代田短期大学紀要, *44*, 58-70.

中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁枡算男・立花政夫・箱田裕司（編）（1999）. 心理学辞典　有斐閣

西村佐彩子（2007a）. 曖昧さへの態度の多次元構造の検討 ── 曖昧性耐性との比較を通して　パーソナリティ研究, *15*, 183-194.

西村佐彩子（2007b）. 曖昧さへの態度と関連要因の検討 ── 完全主義傾向・Big Five との関連 ──　日本心理学会大会発表論文集, *71*, 2EV01.

岡田守弘・井上　純（1991）. 絵画鑑賞における芸術性評価要素に関する心理学的分析　横浜国立大学教育紀要, *31*, 45-66.

高田知恵子（1998）. 病院における絵画の調査（病院にはどんな絵があるか）── 絵画鑑賞療法の基礎資料Ⅱ ──　群馬社会福祉短期大学研究紀要, *1*, 59-65.

高田知恵子・黒須正明（1997）. 絵画鑑賞療法 ── アートセラピーへの新しい試み ──　臨床描画研究, *XII*, 182-202.

The Association between Evaluations of Representational and Abstract Paintings and Attitude toward Ambiguity

Ritsuko AZAMI and Mayo Totsuka

Abstract

This research used representational and abstract paintings to examine the association between evaluations of paintings and attitude toward ambiguity. A total of 81 college students participated. All participants responded to eight adjective pair questions (e.g., "pleasant — unpleasant," "gaudy — plain") for all paintings (6 representational, 6 abstract). Factor analysis of the eight adjective pairs (principal factor analysis, promax rotation) resulted in the extraction of an "evaluation" factor and an "activity" factor. The difference yielded by subtracting total score for abstract paintings from that for representational paintings was calculated for each factor and multiple regression analysis was performed to explore the impact of attitude toward ambiguity on them. The results demonstrated that "anxiety" increased evaluation for representational paintings, while "enjoyment" and "exclusion" increased activity for abstract paintings. The real-world applications of this study were discussed in light of the knowledge that associations with psychological maladaptation differ depending on attitude toward ambiguity.

Keywords: paintings, representational paintings, abstract paintings, attitudes towards ambiguity